



リビングから眺める、玄関先の土間風景にうっとり。「細かい部分まで職人さんの手仕事が行き届いた家は、見応えがあって飽きがない。良い意味でアンフォーマットだから、表情が豊かです。三上さんの言葉に納得!



緑豊かな景色を愛でられるピクチャーウィンドウを配した和室。天井を少し高くして、張り板を新しく張り替えたそう。シックな自然素材がいい味を出している



麗音舎屋根の古民家をリノベーション。和をベースに、さまざまな要素をバランス良く組み合わせて、家の中が装飾された空間に「東照」に見に行くよ、いろんな発見がもたらされるはず



玄関からすぐの場所は、人々が集えるカフェ風の土間空間。アンティーク調のタイルやレンガを配し、まるで海外の住みよいよ

くら」を覗いてみると「目瞭然。日本の古民家には、洋風のものを受け入れる懐の深さがあることがわかる。こういった感覚をここで直に体感しながら、自然素材が与える癒しや居心地の良さも味わってほしいですね」と三上さん。また、「空間演出として、重厚な太い梁や小屋裏などを開放し、建物構造など昔のありのままを見せるのがポイント。そうすることで深みのある趣が家中に広がり、ロマン溢れる佇まいへとラスアップしていくでしょう」と、古民家のリノベーションのコツを教えてください。

築140年のモデル住宅

Studio Kazenokura

スタジオ

「風のくら」

ハウスランド社

古民家が教えてくれる、新しい景色と癒しの時間。

今も息づく140年前の大黒柱と、松の葉、レトロな「和」洒落た「洋」が調和する空間。福岡では珍しく、貴重な存在である。古民家のリノベーションモデル住宅を覗きに、ハウスランド社の「風のくら」を訪ねました。



昔ながらの古民家には、洋風なものも受け入れる懐深い魅力がある。ハウスランド社が手掛ける「風のくら」は、築140年ほどの古民家をリノベーションしたモデル住宅。運動的で立派な梁と、木に包まれた癒しの空間が広がり、新築では表現できない長い時の流れや日本の侘び寂びを感じ取ることができ、さらに玄関先にはもともと土間スペースを活かし、イタリア製のタイルを敷き詰め、壁にはスペイン産の西洋漆喰、インテリアにアイアンのシンデレリアや色ガラスなど洋風のアクセントを随所に散りばめている。同社の代表・三上さんによると、築100年もの古い日本家屋はインナーシャイナルなメンテナンスを待たない。なぜなら、昔の古民家は本物と呼べる天然素材で作られているからです。スライスをはじめる、ヨーロッパの田舎にも「風のくら」のような家屋があり、その土地の自然のものを材料にして、伝統技法で作られている。国は違えど、家づくりの根っこ部分が共通しているので、これらの和と洋をミックスさせてもバランスが取れて調和する。実際「風の